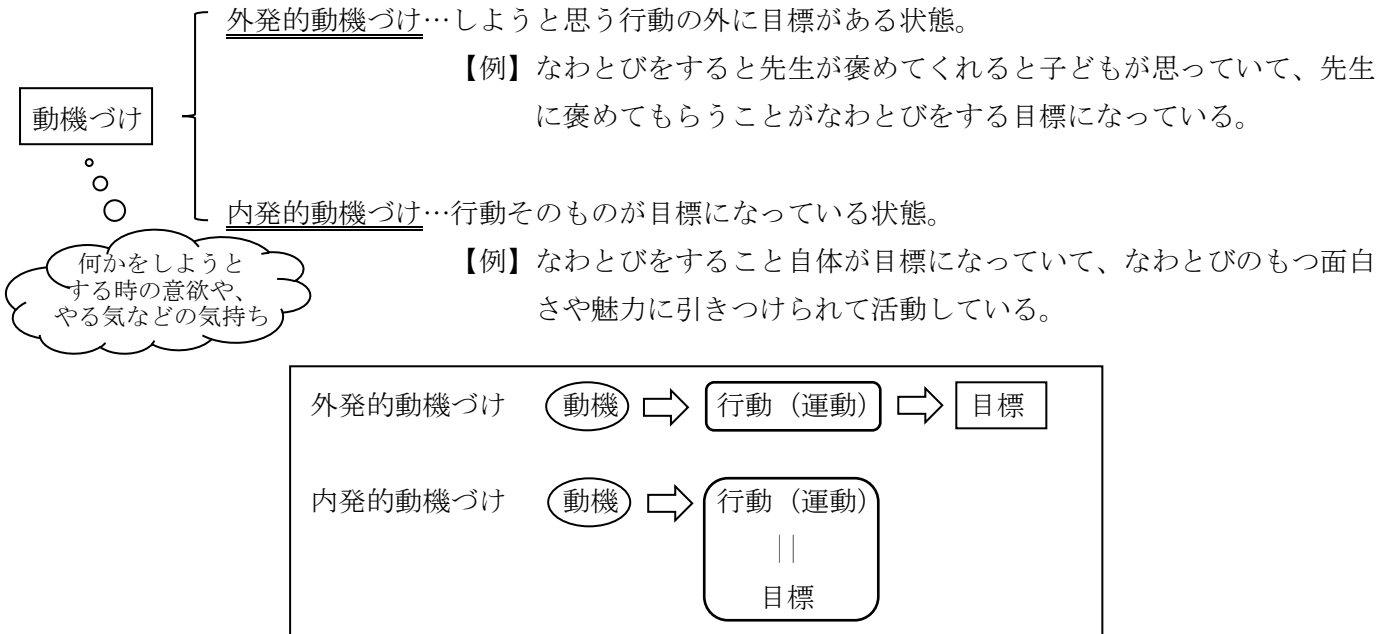


(1) “遊び” とは (遊びとして行う運動)



◎外発的動機づけが大きいほど、非遊び要素が大きくなり、内発的動機づけが大きいほど、遊びの要素が大きくなる。

⇒保育者は子どもたちがどのような思いで活動しているのかを見極めたり、内発的動機づけを増やしていく関わりをしていくことで、子どもたちが“遊び”として運動遊びをしていくことができる。

(2) 遊びとしての運動指導

- ・ **自己決定** …自分で決めてやっている。
(なわとびをするか他の活動をするか、どんな跳び方をするかなど、子どもが決めて行っていること)
- ・ **有能さの認知 (有能感)** …自分は (運動が) できるという気持ち。
(自分はなわとびができる、跳べる、と思う気持ちで活動していること)

◎子どもができるだけ自己決定的に運動をしたり、「できる」ことの経験や達成感を感じながら活動できるように保育者が援助していくことで、内発的に動機づけられた遊びとしての運動指導をしていくことができる。

(3) 多様な動きとは

◇幼児期運動指針のポイント 「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」

◇幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 領域「健康」の改訂

「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整できるようにすること」

- ・「多様な動き」には、以下の 2 つの意味がある。

○レパートリーの多様さ …色々な種類の動きをする。

【例】歩く、走る、転がる、ぶら下がる、這う、押す、投げる…

○バリエーションの多様さ…1つの動きに変化をもたせる（空間的・時間的・力量的変化）。

【例】“走る”動きの変化・空ジグザグに、時速さを変える、力坂道を走る、など

⇒幼児なりに幅広い動きを経験していくことが重要。

(4) 多様な動きを引き出す指導の工夫

・基本的な動きのレパートリーは、子どもも大人と同じだけある。

⇒保育者が様々な動きのレパートリーを頭に入れておくことが大切。

・運動器具・用具を“〇〇用”と決めない。

【例】マット…転がる、大きな雑巾のようにして押す、マットの端ギリギリを床に落ちないように歩く、丸めたマットの上に上る、など様々な遊び方が考えられる。

・「レパートリー」に比べ「バリエーション」の方が意識されにくい。

空間的・時間的・力量的に、いつも同時に変化させられるわけではないが、3つの要素があることを意識しながら活動していく。

(5) 運動が苦手な子どもや意欲的でない子どもへの指導の工夫

運動が苦手だったり、意欲的に参加しにくい子どもの場合、集団の中では思いきり活動できなかつたり、達成感や満足感を十分に得ることが難しい場合がある。⇒保育者の指導の工夫を

①できることから始め、できることの質を高めていく（(2)の有能感にもつながってくる考え方）

できない→できる →興味や意欲がもちにくい

できる →できる（質の向上）→達成感・自信・意欲

↳ (3)のバリエーションの視点から、時間をかけて多様な動かし方を経験できるようにする。

②応答的な環境の重要性

「できた」「できない」の結果ではなく、子どもの気持ちや、「ここがよかった」など質的な変化を認める言葉をかけることで、活動への興味や自信につなげていく。

③子どもが思わずやってみたくなる（動いてみたくなる）ような工夫

⇒イメージを上手く活用する（絵本、忍者になりきる、音楽、など）。

動きのイメージがもてると、主体的にやってみたくなる。

④直接的に活動に関わることでできる機会を設ける

他児と同じように参加しなくても、その活動に直接関わる機会を工夫していく。

【例】見る、応援する、役割をもつ…

↳ マット、跳び箱など、他児の後ろに並んでいると活動に関われない⇒横で見る

興味・関心の
高まりへ

⑤運動の日常化につなげていく工夫

ちょっとした機会に自分のペースで挑戦できる環境を用意し、運動経験を積み重ねていく。

【例】廊下にケンパの印をつける、天井からボールをぶら下げる、など

⇒子どもがその場所を通る時に自然と運動ができる。